
俺と彼女の明確な温度差

維川 千四号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と彼女の明確な温度差

【コード】

N09060

【作者名】

維川 千四号

【あらすじ】

語り部の俺こと“トオル”と、哲学的な彼女こと“ユキ”の、明確な温度差。

(前書き)

本拙作は2010・10・11～12・31まで開催中の『飲茶様主催「哲学的な彼女」企画』に投稿させて頂いているモノと同じです。

内容と致しましては『男女がただただ、ほのぼの・らぶらぶ・でれでれ・いちやいちやしている』『モノとなりますので、苦手の方はご遠慮くださいませ。』

「私ね。トオルのこと、よく分からなくなってきたの」

ユキがそう言い出したのは、今にも雪が降り出しそうな曇天の下。俺が暫く前に数えるのを止めてしまった、何回目かのデートの帰り道だった。

ともすればこれから別れ話に発展しそうな発言だが、俺に焦る気持ちは微塵も無い。

……一応、俺がデート回数を数えてないことを知っていて、ご立腹な可能性も無きにしても非ずだが。

だがそれでも、俺の心を海に喩えるならば風の状態。波も風も存在しない、静かな世界だ。

勿論、このままユキが別れ話を切り出したなら、俺は荒れ狂う波に吞まれて溺れる自信がある。瞬間　　というか刹那で、海底まで沈めると自負している。

まあ要するに、俺はユキが大切だ。恥ずかしげもなく、そう公言できる。誰かが求めるなら、世界の中心で叫んでやっても良い。

そして、そんな俺だからこそ「ああ、また始まりましたか」くらいの気持ちで、ユキの発言を理解してあげられる。

身長の低いユキの歩幅に合わせた歩みを止めることなく、

「俺には、白い服でカレーうどん食べるユキの気持ち分からない」と、返してあげられる。

するとユキは、

「だって食べたかったんだもん。隣の人が美味しそうにカレーうどん食べてるのが悪いんだもん」

と、小さな唇を小さく尖らせた。

「……………」

海水温、二度上昇。ノンストップ地球温暖化。おめでとう、俺。
ありがとう、俺。

「それに、私は最近の漂白剤の力を信じてるから」

「……………」

頑張れ、漂白剤。負けるな、漂白剤。お前なら出来る、漂白剤。

そんな風に、俺が応援歌を作詞・作曲しようかというところで、「
で、話は戻るけど」とユキは言う。

「私。トオルのこと、よく分からなくなってきた」

「具体的には？」

「例えば、さつきテーブルの角に股間をぶつけたトオルの痛みが、
私には分からない」

「……………うん、ごめん。あの痛みを女性であるユキに説明できるだけ
のポキヤブラリーを、俺は持ち合わせてはいない」

とても優秀なことに、吾輩の辞書に不可能という文字は記載され
ている。

「というか思い出させないでくれ。さつきの三分間くらいの悶絶が、
カリフォルニア州知事みたいに「I'll be back」して
くるから。」

「他には……………この間ガードレールを華麗に跨ごうとしたけど失敗し
て股間を」

「ごめん。これ以上、俺の息子を苛めないでくれ」

「ついでに俺の自尊心も。」

もしこれが過保護だというなら、俺はモンスターペアレントと呼
ばれて結構だ。だって俺の息子も自尊心も、かの有名な液体金属み
たいな強度と柔軟性はないんだから。

「あとは……………今日のデート中にミニスカートの女の人のことを、ト
オルが目で追ってたこととか」

「……………」

「違っんだ。あれは俺のせいじゃないんだ。弁明の機会くらい与え
てくれ。もし駄目だと言うなら、こっちは最高裁まで上訴し続ける

覚悟だ。

あれは、男として生まれた俺のサダメなんだ。運命と書いてサダメなんだ。

男 いや、生物学上オスと分類される動物には、視線自動追尾機能（eyes homing system）が全車種標準装備なんだ。今ならカーナビをセットにしてもいい。

だから許してくれ じゃなくて、認めてくれ。

というか、もしかしてユキさん、さっきからそのことを怒ってらっしゃいます？

「別に、全然。これっぽっちも怒ってないよ」

と、表情一つ変えずユキ。

「……一体いつからユキは読心術を？」

「そんなのは出来ないよ。今の私じゃ精々頑張って読心術が限界だよ」

「……」

よし。今度からは友達とのバカ電話（芸能人なら誰と付き合いたいか的な）も気を付けよう。

というか、いやいや読唇術も充分すごいですから、と突っ込もう思ったところで「で、また話を戻すけど」とユキは言葉を続ける。

「私ね。結局、人と人は分かり合うことは出来ないと思うの」

「と、言いますと？」

「読心術が出来ない以上、私にはトオルが今考えてることは分からないし。トオルの痛みも、トオルの恥ずかしさも、トオルの見るものも、私には分からない」

どれだけ一緒に居たって、どれだけ近くに居たって、絶対分らない。

「トオルは、何かに足の小指をぶつけたことあるよね？」

「……うん。そりゃあ、それなりに」

「そのとき、すっごく痛かったよね？」

「ああ。痛いとかそういう次元超えてた」

「だけどね、そのときトオルが感じた痛みと、私が感じたことのあ
る痛みはイコールじゃないんだよ。場所も時間も力加減も、状況全
てが違う。そして何より、トオルと私は違う人間だから、感じた痛
みが同じであるはずがない」

「まあ確かに、痛かったという感覚を、本当の意味で『共感』する
ことはできないな」

それは似たような感覚を持ち寄って『共感』している気になっ
ているだけだ。

「この間のガードレールの話だって、一緒に居た私も恥ずかしかつ
たけど、それだってトオルのそれと私のそれは違う」

「……うん。実際、ユキはすぐさま赤の他人ですよ的なオーラ出
てたしな」

というか、暫く俺から数メートル離れて歩いてたしな。話しかけ
ようとしても逃げるし。

「ところで、後学のためにトオルの実体験の感覚から教えて欲しい
んだけど、ガードレールを華麗に跨ぐの失敗した後、すぐに周囲の
人に対して何事もありませんでしたよ的なアピールをしたのは何で
？」

何事もあつたくせに。がつつり股間強打したくせに。

と、器用に目だけで笑うユキ。さすがは素敵な性格の持ち主だ。
愛してるぜ、この野郎。

だからお返しに何かユキの恥ずかしかった話はなかったかな、と
脳内検索を始めると「まあ、それはいいとしてさ」と話を先に進め
る。

「私たちが見てるものも 見えてるものも、もしかしたら違うか
も知れない。私が赤だと思っっているものは、トオルにとっての青か
も知れない。地域によって虹の色の数が違うように、人の数だけ見
えてる世界がある」

虹を二色で表す地域もあるのよ、とユキさんのプチ知識。

「だからもし、トオルに霊魂的なものが見えていて、それが原因で

ホラー映画に異常に恐怖するのだとしても、私はその感覚を知り得ることは出来ない」

「……………」
「……うん。それ、ただ単に俺がビビりなだけ。」

「例え私の隣にいるトオルが実は霊魂的な存在で、その影響でミニスカートの子の人を目で追うのだとしても」

「頼む。殺したいほど怒っているのなら、一発殴ってくれ。もしくは、いつそ殺してくれ」

相手がユキなら、俺は本望だ。

するとユキはさらりと、

「やだよ。手が痛くなるし、トオル如きのために刑務所にも行きたくないし」

と、本気で眉間に皺を寄せて言った。

「……………」
「……さすがにトオル如きは無いよ、ユキさん。本当に俺が霊魂的な存在だとしても、それは傷付くよ。というか、その言葉が致命傷だよ。もう死んでるのにさ。」

そんな感じに俺の心が今日の寒空と同化し始めたところで「まあ今までの話を要約すると」と、ユキは本題を切り出した。

「私は、トオルのことがよく分からない。トオルが霊魂的な存在ではないのだとしても、他の誰かと本当の意味で『共感』できない以上、トオルが存在していると私は言い切れない」

トオルが私の妄想だって可能性を、ゼロにすることは出来ない。

「トオルの考えも、痛みも、恥ずかしさも、見てる景色も、私は何一つ『共感』出来ない。トオルが隣に居るといふ存在証明を、私は何一つ持ち合わせていない　今は」

「今は　と、言いますと?」

「近い未来　というより今、私は存在証明を手にする方法を一つだけ知ってるから」

「へえ。具体的にはどんな？」

と、俺が訊くと自信に満ち溢れた顔で、

「手を握り合うことで相手の体温を認識し合い、お互いが隣に居るということを『共感』するのよ」

と、ユキは笑った。

そしてついでに「手にする方法は、手でする方法なのよ」と、不敵に笑った。

「……………」

……………ごめん。今の台詞は余計だったと、俺は思う。

「というか、私が冷え性なの知ってるんだから、私が言い出す前に握ってきなさい」

手をつなぐためにすごく遠回りしちゃったじゃない、と小さな唇を小さく尖らせながら小さな右手を差し出すユキ。

だからここは素直に、

「これからは善処します」

と、俺の知りうる最高の優しさで、その手を握りしめる。

「おお。タオルの手、温かい」

「そりゃどうも。俺の方は冷たいけどね」

するとユキは「なら良かったじゃない」と、よつやく今回の哲学の最終結論を出す。

「この温度差こそ、お互いが隣に居るっていう存在証明になるんだから」

(後書き)

以上、『飲茶様主催「哲学的な彼女」企画』に投稿させて頂いている『俺と彼女の明確な温度差』でした。

楽しんで頂けたのなら、何よりです。

また、上記企画に只今(2010.10.2現在)参加しておりますので、そちらの方にも評価して頂けると、この上なく嬉しいです。

皆様の「カンボジアの学校建設に寄付しよう」的な温かいお心を、お待ちしております

http://tetugakunovel.sakura.ne.jp/story/system/cgi/sys/list_story.cgi

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0906o/>

俺と彼女の明確な温度差

2010年10月8日12時29分発行